

ネットワーク時代の今を追う  
<http://www.wakabayashi.com/internetroad21/>

## 北朝鮮の地下核実験をめぐって 核問題をネットで読む

### まずはグーグルアース (Google Earth) から

2006年10月9日、北朝鮮は地下核実験の成功を発表した。核クラブは、国連常任理事国の、米国、ロシア、英国、フランス、中国、の5カ国に加えてインド、パキスタン、そして否定も肯定もしないというイスラエルをもし加えれば既に8カ国である。北朝鮮は9カ国目の核クラブ入りに名のりを上げたことになる。

北朝鮮の核実験も、初めは衝撃のニュースとして扱われていたが、時間の経過と共に諸々の既成事実のひとつとして吸収されてゆきつつある。核兵器の

怖さもさることながら、核という言葉にすっかり慣らされてゆく自分の姿の方がもっと怖いとおもう。

北朝鮮が核実験を実施した場所に関しては当初は諸説が入り乱れていた。その後ほぼ確定してきた。いくつかの民間サイトで正確な位置が公表されている。これらのサイトに共通しているのがグーグルが始めた新しいサービス「グーグルアース」が提供する写真を利用していることである。

2006年9月14日、グーグルは宇宙からみた映像と航空写真を組み合わせた全く新しいサービス「グーグルアース (Google Earth)」を開始した。パソコン画面上で宇宙から見た地球をまるで地球儀を回すようにマウスで操作し、好みの場所を特定すれば連続的なズームを楽しみながら、一台一台の車をはっきり認識できるほどまで地上に接近してイメージを自在に検索できる。宇宙をマーケット空間と見立てて、観光情報からビジネス情報までパソコン上の地球儀に連動させてしまおうという構想である。

北朝鮮の核実験場がグーグルアースの「名所めぐり」の専用サイ

トで公開されている(写真1)。正確な緯度と経度が表示されているから、ダウンロードした自分専用の地球儀で場所を確認することができる。民間レベルで、しかも無料サービスでここまで丸見えなのだ。米国の軍事用の情報システムでははるかに精密な情報がリアルタイムに提供されていることは言うまでもないだろう。

### 核クラブウォッチング

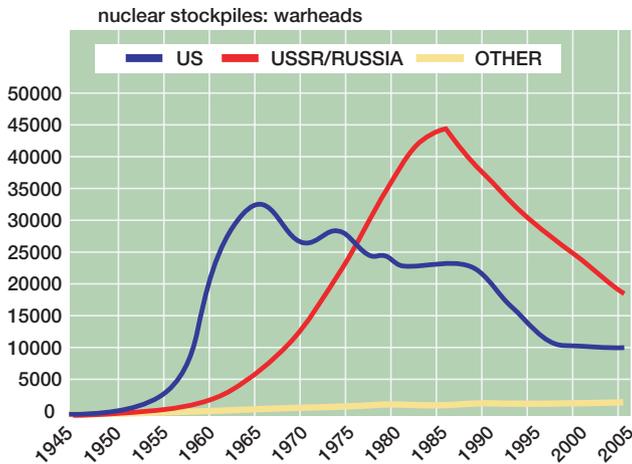
核兵器の歴史は1945年の米国による広島と長崎への原爆投下から始まる。第二次大戦下、マンハッタン計画による原爆開発は完全に米国主導の下にあり、米国による核の独占は1949年のソ連による核実験成功まで続いた。

世界の核兵器の実数を追跡している多くの民間団体が存在する。有力団体のひとつである「自然資源を守る協議会」の推定値を利用してみよう。1949年のソ連核実験までに米国の保有原爆数は既に235発に達していた。英国は1953年に原爆開発に成功。フランスと中国が共に核クラブ入りした1964年、米国の核保有数は既に3万発を突破していた。この間、米ソは1952年と1953年に相次いで水素爆弾の実験に成功している。

世界の核兵器の保有数の推移のグラフに注目してみたい(図1)。問題とすべきは1960年代の動きである。ソ連は凄まじい勢いで核保有数を増やしている(赤線)。一方、米国は1966年の31,700発をピークとして、以後はむしろ減少の方



(写真1)  
北朝鮮地下核実験場：グーグルアースウィキの提供  
<http://googleearth-wiki.noblesse-oblige.jp/> より



(図1) 世界の核弾頭の推移：民間団体のデータからテキサスの大学院生が作成  
<http://www.johnstonsarchive.net/> より

向に向かっていく（青線）。米国のランド研究所のインターネット構想は1964年。インターネットの原型とも言うべきアーパネットの構築に成功したのが1969年である。インターネットの構想は核攻撃に強いコンピュータネットワークを目指したものであった。インターネットのグランドデザインはいかなる形で攻撃されても回復可能な神経（＝指揮）システムの構築にあったのである。

1960年代、米国の軍事戦略の大転換が進む一方で、ソ連はひたすら核の保有数を増やし、運搬手段の巨大化に邁進する。グラフで見るとソ連のピークは1986年の4万発強、このとき米国は23,000発。1986年は象徴的な年号となった。この年、米国ではインターネットの基幹となる「バックボーン通信サービス」が完成した。

ソ連は神経系統を無視して、筋肉増強に走り、しかも過剰に、自ら体力を消耗、経済破綻に陥り自壊した。

要は、同じ核クラブのメンバーといっ

ただロシアはなお16,000発を保有する核超大国である。米国は10,000発の核を保有する。これらの主力は広島型の1,000倍の威力を優に有する水素爆弾である。最も初期の広島型原爆の犠牲者は20万人を超える。単純計算してみても、1発の水素爆弾で瞬時に東京が壊滅する。

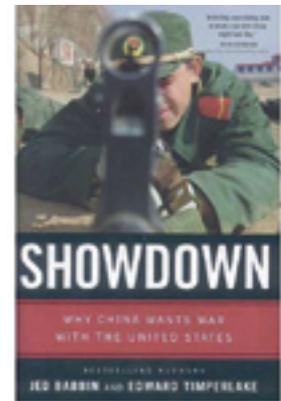
### 小説『ショーダウン』にみるサイバーウォー

2006年6月、一冊の小説が出版された（写真2）。題名はSHOWDOWN Why China Wants War With The United States（決着：中国が米国との戦争を欲する理由）。物騒な題の本だが、小説の形を借りた知的ゲームの書として興味深い。著者はジェド・バツピン（父ブッシュ大統領のときに国防事務次官補、保守派の論客）とエドワード・ティンパレイク（軍事アナリスト）。

2004年9月、中国の胡錦濤国家主席は中央軍事委員会主席に就任して、江沢民にかわる最高権力者の地位に上り詰め

てみても、コンピュータネットワークという神経系統、つまり指揮系統、の裏づけを欠いた「核大国」は木偶（でく）の坊でしかないということである。早い話、巨体の中枢に一発食らったところで試合終了というわけだ。

核軍縮が進んだと言われる今日でも、ソ連の遺産を引き継い



(写真2) 小説SHOWDOWN  
<http://www.amazon.co.jp/> より

た事はよく知られている。小説の中で、胡錦濤の主席就任を祝う席上で、人民解放軍の幹部達が国家最高機密のプロジェクトを紹介する。コード名ルービックキューブと名づけられたプロジェクトはサイバーウォーを担うコンピュータ科学者達により推進されている。産業用、軍事用、政府機関用のコンピュータがサイバーウォーの攻撃対象となる。

本書には北朝鮮の核そして日米同盟に関わる興味深いシーンもあるが、省略して先を急ごう。

この小説の結論部において中国との戦争を抑止するために、著者はいくつかのカテゴリーへの国防投資を主張している。その中でもトップにきているのが、「サイバーウォーシステム」への投資である。防御と攻撃の両面からの重要性を指摘している。2番目が「衛星兵器への対抗システム」。以下、「ステルス」、「潜水艦」、「給油航空機」、そして最後に「人への投資」をあげている。「人」は最高の価値を有する軍事資産だという。軍人には潜在敵国の言語と歴史の教育が必須だとしている。

インターネットが40年も前の構想であったことを思えば、著者がいうサイバーウォーは今やリアリティーとなっていることは疑いない。そして宇宙空間の衛星システムは通信と諜報の要である。核・宇宙・情報は否応無く三位一体の時代に入っている。

(わかばやし・いっぺい)

#### 関連情報

- 宇宙マーケティングをめざすグーグルアース（Google Earth）ホームページ  
<http://earth.google.co.jp/>
- グーグルアースを楽しむ専用サイト「グーグルオブリジェ」  
<http://noblesse-oblige.jp/>
- 核兵器情報を提供する環境保護の民間団体「自然資源を守る協議会」  
<http://www.nrdc.org/>